

# 法学者の監督権（ウィラーヤテ・ファキーフ） の意味範囲

ジャワーディー・アーモリー

## 第 一 講

「呪わるべき悪魔から神に守られんことを、大慈・大悲の神の御名において神に乞い願う。万有の主、万物一切の創造者、預言者と使徒を派遣された方に称えあれ。すべての預言者と使徒に、わけても最後の預言者にしてとりわけ気高き使徒ムハンマドと善良にして清浄なるその家族に神の祝福があらんことを。」

### 法学者の監督権の意味範囲

神の御意志に基づき取り上げようとする議論は法学者の監督権の意味範囲の説明と題するものである。ところで、法学者の監督権（ウィラーヤテ・ファキーフ）は監督権（ウィラーヤト）の根拠が明らかになったときに明瞭になる、なぜなら、この事柄の効力の程度をこの主題そのものが説明することになるからである。何よりもまず、イスラームにおいては監督権なるものがあるのか、否かという根源的問題を明らかにしなければならない。そして、この問題が明らかになった後で、その監督権が本来無謬のイマームたちの権利なのかどうか、を尋ねなければならない。さらに、この高貴な地位が理解され、説明できた後に、議論の主題が容易に理解できるようになる。

イスラームについて厳密な考察を行い、イスラーム諸学を調査すればよく知られることだが、イスラームはただ単に靈魂を清め、個人と創造主との関係を強化するためのものではない、さらにイスラームは新智学や倫理学に集約されるものでもない、むしろ、こういうものはイスラーム諸学の一角にすぎないのである、なぜなら、イスラームにおいては信仰の問題も政治の問題も軍事の問題も法の問題もまた議論されるからである。

イスラームの中には個人と個人の関係も、社会内関係も国々の関係もはつきりと見いだすのである。

イスラームの一部が宗教的義務と教義の解説に関わるとすれば、他の部分は監視と指導と教導と忠告と教訓であり、さらにまたある部分は規定と法律と規則なのである、というのも規定や法律は実施されねばならぬからである。

この小研究はイスラームが1つの組織体であり、かつまた1つの政府であることを示すであろう、さらに、それが単に倫理や神智学や創造主にたいする個人の義務の問題を論ずるのみでなく、むしろ、あらゆるものに義務を定めていることを示すものである。すなわち、次のような言葉がある。「もしもひとがこれらの義務を順守しなければ、しかじかのようになる、また、もしもあるひとがイスラームの領域を侵犯するならば、その者にはしかじかのとおりにせよ、同じく、もしもだれかが君の思想の聖域と信条を攻撃するなら、いかにして、それに対抗し防衛するか」、とか。そこで、これらすべてがイスラームの教義の一部であるとすれば、イスラームは政府であることになる。それは単に倫理、神智学、イスラーム政体というだけではない、なぜなら、これらのあらゆる問題や良識や規定を取り上げるからである。

イスラームは思想と同等なものとは見なすべきではない、なぜなら、思想に従う輩は思想の聖域にのみ計画をもつだけだからである。（思想の場合は）ある思想の流派ではしかじかのことがらについてこう考えている、他の流派は同じ問題についてかような意見を述べている、（しかるに）イスラームは同一のことについて別な意見をもっている（というだけのことである）、したがって、イスラームは単なる世界観ではないし、単に意見をだすだけではない、むしろ、実践もする。それは支配もする。ただ単に見識と学識が問題なのではない、努力もまた問題となるのである。もしも、イスラームが人間に道を示し、責任を求めるのであれば、それは政治体制となる。

そして、イスラームがすべての誤った思想を阻止するために、やって来たものであるならば、当然、それは政治体制なのである。さらに、イスラームがあらゆる圧政の侵犯を妨げるために来たものならば、また、あらゆる福音と計画と共に来たものであるのであれば、それは当然、政治体制なのである。

「彼（アッラー）こそは御導きと真理の宗教とを持たせて使徒を遣わせた、それはこの宗教をほかのあらゆる宗教に勝るものとするがためである。」<sup>1)</sup>

すなわち、至高の神は自らの使徒を真理の宗教の導きと共に派遣したのである。「共に」という語は随伴という意味である。すなわち、導きを携行し、真理の宗教の同伴者である使徒の使命のことである。「使徒を遣わせた彼」すなわち神の伝令を送り出したのである。それでは、一体何者と共に？「御導きと真理の宗教と共に」つまり、導きと真理の宗教を同伴として、ということである、それらは預言者の友であり同志であり同行者であって、けっして預言者を見放したことはなかったし、預言者もそれらを捨て去ることがなかったのである。

至高の神は、預言者は導きと共にあり、真理の宗教は預言者の同伴者といっている。したがって、預言者が来た、ということはすなわち導きがきた、ということである。すなわち、人々を生活のあらゆる次元において導くために真理の宗教が来た、ということである。忠告と教訓のみを与えるためではない。というのも、あらゆる種類の圧政の露店をねこそぎにするためにも来ているのだからである。したがって、預言者は2つの仕事のために来たのであって、1つの仕事のために来たのではないのである。

一方では、善に呼び寄せ、他方では抑圧と暴虐の露店をねこそぎにするために来たのである。神が「この宗教をほかのあらゆる宗教に勝るものとするがためである。」と約束したのは預言者の宗教をあらゆる党派、政府、体制に優越するものとし、勝利するものとするためである、「たとえ、不信者どもの気に召すまいと」「たとえ、多神教徒の気に召すまいと」「証言は神のみで充分である」。

これが預言者の使命の精髓である、したがって、宗教は単なる世界観などではない、導きと真理を通じての社会運命である。しかも、1つの社会を運営することだけでもない、なぜなら抑圧をうみだす社会を阻止しなければならないからである。

「既に、すべての民（ウンマ）に使徒を派遣したのは、人々が神（アッラー）を信仰し邪神をさけるようにするためである。」<sup>2)</sup>

「既に、すべての民（ウンマ）に使徒を派遣した」のは何のためなのか、またいかなる計画があるのか？ 1つは「人々が神（アッラー）を信仰する」ためであり、2つは「邪神をさけるようにする」ためである。「さけること」とは自らをある側に置き、邪神を他の側に置くことである。不法行為をさけると言うとき、それはすなわち不法行為を1つの側におき、自らをもう1つの側におくことである、そして邪神の方へ歩を進めないことである。したがって、神の宗教の精髓は導きを確定し邪神と不正を否定しているのである。

宗教は政府と国家を要求する、宗教は邪神との闘争と不正との戦いをもとめる。このこと自体が政府を要求している、というのは政府がなければ、抑圧に対抗することの可能性も無いからである。したがって、道徳や靈魂の浄化の次元はイスラームの一部にすぎない。

イスラームが神の規定を実施せよと命ずるならば、たとえば、もしもだれかが盗みを働くならば、その者の手を切れとか、暴動を起こす者を絞首刑にせよとか、治安を乱す者を鎮圧せよとか、…これらの事柄の実行には政府が必要である。したがって、イスラームが政府であって、単なる一宗教ではないということには疑念の余地がない。（かくして）第1の原理が確立した。

## 第二原理

どんな人物が政府の軸となるべきなのか？

ひとりの人が支配すべきなのか？ もしも肯定的に答えたとするならば、その場合独裁にならないのか？ あるいは、特殊な集団が支配するのだろうか？ それとも、このどちらでもなく、人民の人民にたいする支配なのか？ あるいは、この3者のいずれでもないのだろうか？

イスラームにおいては支配権はどのような人物の手にあるのだろうか？ 特定の人物がいてその人の人格が支配するのであろうか？ 特定の集団がいてその思想が支配するのであろうか？ それとも、人々によってえられた特定の人達が人々を支配するのであろうか？ これらのうちのいずれであらうか？

もしも、イスラームが私は支配を欲する、私は思想を表明するだけの単なる学派ではなく、努力をもする、というのならば、その場合、それ自身が支配することになる。そして、個人が支配するとか、あるいは人格が支配するようなものには支配の許可をあたえない。

クルアーンの中で神は使徒に「神があなたに示めたものによって、人々の間をあなたが裁くために」<sup>3)</sup>と言っている、すなわち、あなたが派遣されたのは人々のあいだにおける支配者として支配するためであるが、それは、個人的な欲求や欲望や思惑によるものであってはならない、また、あなたが見ているものによるものであってはならない、むしろ、啓示からえたものによらなければならない、「人々の間をあなたが裁くために」ではあるが「神があなたに示したものによって」なのである。神が啓示によって示したものによって支配しなければならない、あなたが獲得したのと同じ方法で支配せよ！

神が世界を創造したのであるから、その創造主が世界を育まなければならない、なぜなら、神こそは万有の主だからである、人間はこの普遍的原理の例外とはならない。人間を創造した者は人間の主である。神以外にだれも人間を養育する権利をもっていない。したがって、啓示をつうじて人間を統御し監督する。これゆえ、神は使徒に「神があなたに示したものによって、人々の間をあなたが裁くために」といったのである。

人間社会を啓示以外のものの手に委ねることがないようにするために、人間の育成を啓示以外のものの手に委ねることがないようにするために、神は自らの使徒を誤謬から防護された3つのレベルにおいて公表した、その時、

神は“啓示を取れ、啓示を通じて人々を支配せよ、啓示に支配させよ”、といったのである。

第1は啓示の獲得のレベルである、第2は啓示の記録と保持のレベルである、第3は啓示の公布のレベルである。

全ての思惟する人はこれら3つのレベルに関係しているので、もしも誤りを犯すとすれば、これら3つのいずれかのレベルにおいて誤りを犯すのであり、また、もしも過誤を免れているとすれば、これもまた、これら3つのレベルにおいて過誤を免れ、それから防護されているということである。

### 第1のレベル

啓示の獲得の段階のことである。神は使徒を無謬なる者として告知した。すなわち、神が述べられたことを、あなた（使徒）は正しく受けとっている、のである「誠実なる聖霊（天使ジブリール）がそれを携え、あなたの心に下し賜う」<sup>4)</sup> かの啓示の伝令、誠実な天使がこの啓示をあなた（預言者）の心の中に示し下されたのである、そしてかの啓示の伝令は決して間違いを犯さない、彼の者は決して修正したりはしない、彼の者は決して変更したりしない。彼の者は得た物を全て誠実に守ってあなたに送り届けるのである。あなたもまた、言われたことは全て受け入れなさい。「誠に、あなたは賢明にして大知のお方からクルアーンを授かった」<sup>5)</sup>、すなわち、預言者よ、あなたは神的知識に会いに行き、その方に巡り会い、そしてこの啓示を神のもとより獲得したもうた、ということである。（このクルアーンの章句の中の）この *ladun* という語（が無謬であることの由来）である、もしも人が知識をかの澄明なる源（神）から獲得したのであれば、その知識は *ilm laduni* 《神に由来する知識》と呼ばれる。（*ladun*）すなわち、……のもとで（*'inda*）である。（*ladun*）はペルシア語の“……のもとで”にあたる。したがって、もしも人がある知識を知識の源（神のもと）から獲得したのであれ

ば、もはや、憶測や妄想や悪魔の入り込む余地はない。また、変化や過ちや忘却が入り込む場所もないし、修正が入る余地もない。神のみもとにある知識なのだから、アフリマンの忍び込む道からは防護されている。この第1のレベルとは、神が使徒はただしく理解している、といわれたことは無謬の理解ということである。

## 第2のレベル

啓示の記録と保持の段階のことである。このレベルのことをクルアーンは無謬性と共に明白にしている、すなわち、使徒が神から得たものは彼の心の境域に記録されている、彼の記憶はただしく保持し、忘れることもなく、修正することもない、と。

## 第3のレベル

啓示の公布もしくは書き写しの段階の事である、というのも、人々が書くために神は語ったのであり、人々が聞くために神は語ったのであるから、この場合神は次のように述べている。「沈みゆく星にかけて、あなたたちの友（預言者ムハンマド）は、迷ってもいないし間違ってもいない。また気まぐれを語っているのでもない。あれはかれに下された啓示以外のなにものでもない。」<sup>6)</sup> すなわち、言葉の領域においても無謬である、すなわち、掛値のないということである。<sup>7)</sup>

過ちや忘却が発話や書き写しの中にはないのである。彼が語ることは全て啓示である、むしろ、すべて啓示であるものが言葉を表しているのである。

「彼は見えざる世界から得たもの（啓示）について吝けちしない」<sup>8)</sup>、すなわち神の使徒は吝嗇ではない、啓示を出し惜しみしてなにかを隠したり、言わなかったりすることはない、ということである。したがって、得たもの



は全ていうのである、そして、彼がいうことは全て啓示なのである。したがって、使徒の言葉の宮居は無謬なのである。

あるとき、彼（使徒）は人々に「あなたのもとで、我々が聞いたことを全て書き取ってもよいのか」と尋ねられた、彼はそうしてもよいと答えた。すると彼らは「機嫌の良い時にも怒っている時にも、よいのか」と言った。すなわち、あなたは時には快活な様子で話すこともあるし、時には怒って話すこともあるが、聞いたことはなんでも書き取って良いのか、ということである。すると、使徒は「宜しい、私から聞いたことはなんでも書き取っておきなさい、なぜなら、私が満足しているとすれば、それは神ゆえの満足であるし、わたしが怒っているとすれば、それもまた神ゆえの怒りである、機嫌が良いということが私を無謬性の領域から外においやる事もできないし、怒りが私を無謬である事の境域から引き出すこともできない」と言った。

もしも、わたしが怒っているとしても、そのような状態においても私は無謬である、また、もしも、機嫌が良い状態の私を見かけたとしても、良い機嫌の状態の私もまた無謬なのである。

結論として、もしもイスラーム全体がイスラームはただ単なる思想や世界観などではなく、むしろ主権であり支配権であってあらゆる思想学派を圧倒するものである、すなわち「この宗教を他のあらゆる宗教に勝るものとするがため」なのである。支配権であるとする、支配者を要求する。個人ではなくそれ自体が支配しなければならない。それゆえ、神は使徒に「神があなたに示したものによって、人々の間をあなたが裁くために」と言ったのである、「あなたが見たものによって」とは言わなかったのである。したがって、啓示は支配する。

啓示が支配するためには、自らが《啓示の具体例》であるような完全なる人間がいることが必要である。啓示が支配するためには、決して眠ることがない1つの心が必要である。啓示が支配するためには決して罪の思念が入り込むことのない完全なる人間が必要である。その者こそ真に無謬なる者とな

るであろう、なぜなら、彼自身も他の者たちと同様にこれらの義務を実行するように義務づけられているからである。

啓示の支配ということについて、使徒と一般信徒（ウンマ）との間に差がある。使徒の義務はより困難なものである。もしも、神が信仰の次元で5回礼拝せよと他の人々に言うとするれば、すなわち、「太陽が傾く時から夜の帳が降りるまで、礼拝の努めを守りなさい、また暁にも礼拝をしなさい。」<sup>9)</sup>

《日中2回の礼拝、日暮れて2回、朝1回》

神は使徒に、あなたは6回礼拝しなさい、あなたは早朝に起きることが義務であり、夜更けまで起きていることも義務である。「また、夜の1時、礼拝を行えばあなたのために余分のご褒美があるだろう、おそらく神は榮譽ある地位をあなたに与えよう。」<sup>10)</sup> すなわち、あなたは夜目を覚ましていなさい、そして夜の祈禱を忘れてはならない、徹夜はあなたにとって義務である、ということである。

以上は、信仰の次元に関することである。そこで、もしも神が邪神と戦い、不信と闘い、抑圧の政府と抗争することを人々に義務として課したとすれば、神は使徒に次のようにいっている。たとえ、だれ一人あなたを助けず、だれ一人あなたの呼びかけに答えることがなくとも、あなたはただ一人で立ち上がることが義務である、と。

「神の道においてあなただけでも（戦う）ことが義務づけられている。そして、信者たちを激励せよ。」<sup>11)</sup>

すなわち、彼らを邪神との戦へと鼓舞激励せよ、たとえ、だれ一人あなたを助ける者がいなくても、あなただけはただ一人で邪神にたいして立ち上がることを義務づけられている。したがって、個人が支配するのではない、そうではなく啓示が支配するのである。これもまた1つの原理である。

イスラームが政治権力であるとするならば、あらゆる問題を包摂している。このイスラームはそのすべての計画とともに生きて、永遠のものである、決してなくなることはない、なぜなら、それがやって来たかの時から、2つの原

理は普遍性と持続性を伴っているのである。

① 普遍的であること

② 恒常的であること

したがって、使徒の後のイスラームの存続のためにもなんらかの計画が考えられているのである。なぜなら、イスラームがやって来たまさにその時から、この2つの原理を伴っていたからである。

アッラーメ・タバータバーイー教授の説明によると、クルアーンの古い章句（すなわち、使徒の召命の始めの時期に下された、'atāiq これは、'atīq の複数形で意味は伝統がある、古びた、ということである）と呼ばれている章句の中では、この問題は普遍性と持続性を伴っているという、すなわち、この宗教はすべての人々にとって普遍的でありかつ復活の日まで持続するということである。

「それはあらゆるものに対するお諭しに他ならぬ、（クルアーン；38:87）」、「それは人間にたいするお諭しにほかならぬ、（同；74:34）」、「あらゆるものに対するお諭しである、（同；6:90）」<sup>12)</sup>、「あらゆるものに対する警告者となる、（同；25:1）」、すなわち、イスラームがやって来た時から、それが世界を包含しているということを自らに伴っていたことであって、メッカ征服の勝利の後のことではない、また、この宗教は世界を包含してしまうであろうと（布教活動の）終わりの頃に言われただけではなく、預言者がまったく受け入れられなかった彼の時代において、世界制服の雄叫びを上げていたのである。預言者がただ一人だったところに、世界制服を語っていた。家から外に出ていなかった頃に、世界的であることを企画していたのである。その時にメッカ啓示がこの宗教が普遍的で恒常的であると言っているのは、この宗教が人間性のためにやって来たのであり、人間性は変わることがなく、時間も場所も人間性を変化させることがないからである。

宗教は人間の人間性にかかわるものであって、人間的生の周辺にかかわるのではない。科学技術の進歩と共に変化するものは人間の生活の周辺に關す

るものである。宗教は神の御心によりやがて議論されるであろう「法学者の監督権」(ウィラーヤテ・ファキーフ)によって保証されるのである。変化したこともなく、変化してもなく、変化することもないであろうところのものは、人間性の根拠であり宗教はえに関わるのである。建築様式、道路建設、生活様式、衣食の様式は変化するとしても、これらは人間生活の周辺の一部である。それらには「イスラームの規定」(muqarrarāte islāmī)が関係しているが「イスラームの原則」(qawānīne islāmī)は関係していない。変化しないところのものは人間の本性である。そして、この本性を養育するためにやって来たものが天界の啓示である。すなわち、「受動者」も変化せず、「能動者」も変化しないのである。したがって、宗教は永遠なのである。「能動因」も「受動因」も永続する。そして、この養育を受ける者は決して変化することのない人間の魂なのである。この養育の責任者は神である、神は変更しない。計画と養育という神の方法は変更を受け付けけないのである。

「神の慣行には変更はなく、神の慣行には改変はない」<sup>13)</sup>、この人間性の養育の受容者が人間であるならば、またこの養育を与える者が人間の神であるならば、この養育は永遠であり、普遍的で恒常的である。

クルアーンの素晴らしい言葉「それはあらゆるものに対するお諭しに他ならぬ、(クルアーン;38:87)」に基づいて、もしもこの支配権が世界的なものであり、もしも使徒が普遍的原則に従うものとすれば、死も含まれる「あなたも死ぬし、彼も死ぬ」<sup>14)</sup>、というのも、このレベルでは永遠の生の可能性はないからである。

そして、もしも「あなたより前のいかなる人間にも不死を授けたことはない、だからと言って、あなたは死ぬが、彼らは死なないとでも言うのか?」<sup>15)</sup>というのならば、もしも、使徒がこの世を去らねばならないうえに、この世界を包摂する支配権が存続しなければならないとするならば、当然、使徒の後にも使徒の仕事を遂行する人物がいなければならない、そういう人々が無謬のイマームなのである。

使徒の清らかな靈魂に等しい人々がいる「わたしたち自身とあなたがた自身(クルアーン;3:54)」。使徒の清らかなる靈魂に等しい人は使徒の場所に座すべきである、そして、おなじ責務を果たさなければならない。(ただし、立法的啓示の獲得は除いて)、この者こそ彼の無謬のイマームなのである。復活の日まで無謬のイマームの存在はなくならないのである、なぜなら、クルアーンは復活の日まで存在するからである。クルアーンは決して人類から離れることはない、人類もまたクルアーンから離れることはない。

使徒がこの世を去った後の段階では、無謬のイマーム達がいれば、かれらが顕在している間はイマームの監督権、ムスリムの問題の処理権、原則と規定の執行権は彼らの手中にある。そして、もしも彼らが顕在していなければ、(すなわち、我々が不在なのであって、彼らが不在なのではない、彼らが顕在していないということは、すなわち、我々が隠れているということであって、彼らが隠れているということではない、そうでなければ、イマームは不在ではないのである、イマームは隠れていないのである、むしろ、我々が不在者なのである、我々が覆い隠されているのである。そうだとすれば、その時代には、我々は彼の絶対無謬の神の友を知ることがない、彼こそは使徒の魂と同じであり、彼もまたすべてのレベルにおいて無謬なのである)、もしも彼を知る術がないのならば、我々はなにをしなければならないのか？

自らの明白な証明に基づいて永遠で世界的である宗教は普遍的で恒常的である、宗教は生きるために証明者をも欲し執行者をも欲する、宗教は規定に通じている者、それを実行する者を欲する。さもなくば、それは全く未開墾の土地のかたちででてきた一連の規定である、そんなものがはたして支配できるであろうか？あるいは、それがイスラームの福音をもたらすイスラームの養育の具現者を要求したりするであろうか？イスラームが生きるためには実行されねばならない。それでは、どのような人物がそうすることができるのであろうか？それは法学者である。

法学の領域に関する限り、法学者は通曉していなければならない。なぜな

ら、当然法学者の監督権が及ぶ領域は法学の支配領域の中に探究しなければならないからである。法学が及ぶ範囲である限り、法学全体を綿密に調査して、絶対的な法解釈者（ムジュタヒド）となり、また完璧な法理解者となる責任を法学者はもっている、そのためには、クルアーンおよび無謬の諸イマームの伝承に十分な知識をもっていなければならない。法学が解説を要する場合は、その意味を明白にするために法令発布の権限と責任をもっている。クルアーンという書物は全知識を解き明かすものとして来たのであるから、ある人にイスラームの問題が解けなく、ある種の問題について「私は知らない」などというならば、その人はワリー（ウィラーヤトを帯びている人）ではない、なぜなら、そういうケースについても法的知恵が存在しているのに、その人が法的知恵の素養をもっていないということであるからである。

「あなたにクルアーンをあらゆるものについての証しとして下した。」<sup>16)</sup>

クルアーンが人間の全側面を説明するものであれば、クルアーンを記憶し、解説する人は人間のあらゆる面に通じていなければならない、また預言者の家族から伝わったものを研究していなければならない、またいかなる箇所にも不得手であってはならない、何故なら、もしもある箇所について不得手であるとするならば、その人は絶対的な法解釈者（ムジュタヒド）ではなく、部分的法解釈者である。

部分的法解釈者とは、ある種の問題を法解釈の努力（イジュティハード）により理解をするのだが、ある問題については自分では解決できない者のことである。したがって、そういう人は監督権をもっていない、そういう人はムスリムのワリーではない、すなわち《法令の根拠》（マルジャエ・ファトワー）でもないし、《監督権の源泉》（マスダレ・ウィラーヤト）でもない、なぜなら法学の一部はながく延長している、その人はその部分に到達していないからである。法学の光線が照らし出すところならばどこでも見ることができ、法学全体を明らかにすることができるような法学者は監督権をもつのである。また、法学全体がその人にとって明らかであれば、その場合その人

は絶対的な法解釈者となる。

多くの問題は様相も新しく、最近発生したものであり、イスラームの発祥期やそれに続く数世代にはなかったものである。新しい問題を解決する事もできず、それを宗教の原則や細目と照合することもできないような人は絶対的な法解釈者ではない。そういう人は監督権をもつ法学者ではない。なんらかの問題が発生して、その人が法解釈に基づいて裁定を法典から取り出すことのできない人は、部分的法解釈者であって、絶対の法解釈者ではない。部分的法解釈者は多くの事柄について普通人と同じである。

したがって、絶対的法解釈者は信仰の問題であれ、規定の問題であれ、取引の問題であれ、政治の問題であれ、全てのことを法解釈に基づき知らねばならない。これが《法学者》の知的立場である。彼はこれら全ての領域において法学者の個人的行為に関することも実行し、公表し記録すべきものについては公表し記録しなければならない、なにも隠してはならない。

また、彼は啓示のもたらしたものを理性的論証によって理解する立場においても絶対的法解釈者でなければならない、また行為の立場においても罪悪と関係の無がなく、義務を放棄することの無い、正義の士でなければならない。私欲や激情に基づく行為があってはならない、激情に支配されてはならない。というのも、激情に支配されているものはその心の内部に偶像の祭壇をもち、その本性のなかに偶像崇拜が入って来ているのである。

「自らの欲情を神とみなしているものを見たことがないのか」<sup>17)</sup> ゆえに、法学者は欲情を捨て去った者でなければならない、もしも、欲情を捨て去った者でなければ、激情にもとづいて行動してしまうであろう。

それは神の愛でしイブラーヒームの「おやおや、あなたたちは神以外のものを崇めるとは」<sup>18)</sup> という言葉と同じである。この耳の痛い言葉は単に表面的な偶像の祭壇の偶像崇拜者を含むのみならず、内面的な偶像の祭壇の欲情の崇拜者をも含めて、「おやおや、あなたたちは神以外のものを崇めるとは」と言っているのである。

もしも法学者が法学の領域において法令発布のウィラーヤトをもつならば、彼は知的ウィラーヤトを持つ、また彼は知的現存を持つ、また法解釈の見識を持つ、さらに知の領域において正義の現存を持つ、さらに公正の現存を持つ、そして実行者であり、かつ正義に人である、……彼はこれをあらゆる次元において保持することが責任である。これは権利ではなく義務である、彼は啓示の護衛である義務がある。彼には神の規定を保持する義務がある。彼には宗教の番人となることが必然的である、なぜなら、「人々が互いに排除しあうように神が定めていなかったならば、修道場……は完全に破壊されていたことであろう。」<sup>19)</sup> すなわち、神がある人々を他の者たちをもちいて排除しなければ、信仰の拠点は破壊されてしまうであろう、ということである。

それゆえ、資格を完璧に備えた法学者にとり神の宗教を保持することは個人的義務、もしくは集団的義務となるのである。これは、法学者にとって任務である、しかし、法学者のための任務ではない。これは、法学者の職責にとっての義務であって、法学者のための特権ではない、なぜなら、「神の規定を守る者たち……」<sup>20)</sup> とあるように、神の規定を守護することは、法学者にとり義務である。また、知と正義の恵みへの感謝の印として知と正義にたいして責任を負う者となることが義務である。また、知と禁欲の恵みへの感謝の印として、人の権利が損なわれたりしないように、またその人も他人の権利を侵害したりしないようにするために知と禁欲のため守護者となることが義務である。もしも、法学者が法解釈と公正さにおいてこの境地に到達したとすれば、彼はウィラーヤトをもつことになる。その場合、彼のウィラーヤトはひとつの義務として受け取られるのであって、権利として受け取られるものではない。そして、もしもそのウィラーヤトを実行に移さないならば、彼は神にたいして責任を負うことになる、なぜなら、かの無謬のイマームたち（彼らに平安がありますように）は、この法学者のような人物を（イマームの）不在の期間に立てて、法と宗教の守護者の責任を与えたのだからである。そして、次のように言っている。(al-fuqahā al-mu' minūn husūn al-



islām) すなわち、(シーア派の著名な) 法学者は宗教の堅固な砦であるという意味である、彼らはいかなるものも宗教の道からそれることを許してはならず、あるいは、なにか異分子が宗教の聖域に闖入することを許してはならず、さらに宗教の諸規定から何かを取り去ることを許してはならず、あるいは、宗教に何かを付け加えることを許してはならないのである。法学者は守護者であらねばならない。彼はこの砦の堅固な城壁でなければならない。彼の法学的知識と正義は宗教を守るための堅固な砦なのである。法学者は宗教の堅固な砦なのである。彼らにとってこのイスラームを守り、イスラームの境界線を2つの危険、すなわち、異邦人の到来と朋友が去ってしまうこと、から守ることが義務なのである。換言すれば、イスラームのいかなる規定も壊廃しないように、またいかなる誤った規定も法規としてイスラームの中に入り込まないように注意しなければならない。

ウィラーヤトを持つこの法学者は学的理性においても可能な限り完全でなければならない、また、実践的理性においても完璧に実践しなければならない、また、神的な教師たちから学んだものは完璧に学びとおかねばならない、また、自然の中で実践することも完全でなければならない。

すなわち、法学者は学問を正しくその道の人から学び取らねばならないし、また、学んだものを自分自身とその人生の範囲内で実践しなければならない、さらに、それを学的理性の面でも完璧となるようにせねばならず、究極的には実践的理性の面でも完璧となるようにできなければならない。

ファーラービーの優れた言葉によれば、神的社会の指導者や監督者はイスラーム法の守護者たりうるように、正しく理解し、正しく努力するような哲学者でなければならないのである。決して、われわれは自身は宗教を知っているし、実践をしていると言うことはできない。注意せねばならぬことは、イスラームの敵と異分子は天界の法そのものを恐れているのではなく、むしろ法をきっぱりと実行できる法律家を恐れているということである。

あなたがたは食卓の章の次の聖句を読誦したまえ。「今日では、おまえた

ちの宗教を信じていない者どもも、諦めてしまっている、だから、彼らを恐れることはない、むしろ私（神）を恐れよ……。』<sup>21)</sup> すなわち、ウィラーヤトの問題が討議された日に、敵どもは絶望してしまったということである、というのは、外敵どもは、神の使徒は崩御とともにただ立法の書物を残しただけで、やがてこの立法の書物とともにうまうまと近寄って来て、それを思いどおりに解釈することができると思っていたのである。

しかしながら、この書物のために信徒の長、アリー・ブン・アブー・ターリブという名の実行者が任命されると、他のものどもは絶望してしまったのである。というのも、神の代理人（ワリー）の任命と同時に“宗教”は実行の保証人をもつ事になるであろうし、宗教を理解して実行するような人物を定めることで、“宗教”が出現するからである。

この場合にいたって不信者は、嫌悪感を示して去ってしまうか、あるいは戦いをしかけてくるかのいずれかである……。

不信者どもを恐れてはならない、ただ神のみを恐れよ、というのも全ての権力は神に由来しているのであり、神が保持者であるからである。もしも神の宗教を助けるならば、神はあなたがたを助ける力も十分に持っている。

専門家会議(majles-e khibregān)で憲法第5条（すなわち、ウィラーヤテ・ファキーフの問題）の順番が来たとき、東西の超大国は全て専門家会議が分解するように勢力を傾けた。専門家会議を分解させる陰謀は憲法第5条の起案の時から始まっていたのである。

臨時政府の時代にも専門家会議の分解の話題は、ウィラーヤトと法学者の問題の経過と同時に始まっていた。それは憲法について議論がなされていたときに、起こったのであるが、不屈の法学者によって、実現がはばまれたのである。

憲法の第4条は国家の法および条例の全ては、クルアーンと無謬のイマームたちのスンナに一致していなければならない、というものである。この原則はあらゆる法と条例を絶対的かつ普遍的に支配している。何人もこの原則

に違反したことはなかったのか？ なぜそう問うかという、前の憲法にも、ほんの少し違うけれどもこれに似たものがあったからである。いずれにせよ、イマームの不在の時代に共同体（ウソマ）の指導権は十全に条件を満たした、公正、篤信、時勢に明るく、指導力に恵まれ、企画力のある法学者の手に委ねられるという第5条に來た時、専門家会議を分解させるためにあらゆる陰謀が巡らされたのであるが、神の恵みでそれらの陰謀は暴露され、外敵どもはなす術もなかったのである。神の規定の実施の保証が問題となる日に、外敵どもは恐れたのである。もしそうでなかったとして、ただ法規だけというのであればかれらはなにも恐れない。信徒の長（そのうえに平安あれ）のような指導者が任命された時に、ようやく外敵どもは絶望したのである。

“今日、私はあなたがたのために宗教を完成した、私はあなたがたの上に私の恩寵をそそぎつくした・・・”（訳注 ①）

この聖句の一部は、死肉やその類いのものの禁止に関する文脈の中ででてくるものであるのだが、そうした事柄に関するものではないのである。

碩学タババーイー教授（そのうえに、神の恵みがあらんことを）の説明では、死肉の禁止の事はクルアーンの幾つかの箇所に現れており、“今日、……完成した”というテーマの前にもでている。そうしてみると、一体このようなありきたりの事や定めで宗教が完成するものであろうか？ 宗教の完成とか神の恩寵の完了というものは法の知識を十分に備えた監督者（ワリー）の存在によるのである。監督者をもっていない政府は完全ではない。監督者のいない革命は完全ではない。法の知識を十分に備えた監督者のいない社会は完全ではない。“今日、私はあなたがたのために宗教を完成した、私はあなたがたの上に私の恩寵をそそぎつくした、そしてあなたがたのためにイスラームを宗教として承認した。”（訳注 ②）この定めを理解し、説明し、実行し、かつ外敵の攻撃と戦う者が監督者なのである。そういう人がいるこ

とで宗教は完全なものとなるのである。イマームのいないイスラームは十分ではなく、完全でもない。無謬のイマームの後継者がいないイスラームは十分ではなく、完全でもない。外敵は、やって来ると、まず精神的指導者のないイスラームということを言い出す、それから、模範的指導者のいないイスラームということを言い出す、それから、イマームの指導者のないイスラームということを言い出す、それは、意のままに解釈できる無味乾燥の一連の法体系を残さんがためなのである。宗教と法が生き続けるには法を明らかにし、実践する“法の解ける監督者”の光りのもと以外では絶対に不可能なことである。これ以外にはあり得ないことである。ところで、一体いかなる人物がこの地位に達することができるのであろうか？ 一体いかなる人物がこのような責任を負うるのであろうか？ このウィラーヤトという重い荷物を神はいかなる人物に委託するのであろうか？ 宗教の護衛というこの任務を神はいかなる人物にあたえるのであろうか？……

ムスリムのイマームとなる人物に与えられるのである。それでは、人はいつムスリムのイマームとなるのであるのかといえば、それは人がいくつかの段階を完了した時である。クルアーンはこの困難で骨の折れる諸段階の一步一步を明らかにして、次のように言っている。

人はまず信仰の道に全てを捨ててしまわなければならない。その後、進歩をとげ、その後、他の者に先んずるようになる、そして、他の者を追い越し、全ての者の先頭に立つ者となり、イマームとなるのである。人は自然の淵に留まり、自己の神的本性を開花させないかぎり、イマーム性に向かって進歩をとげないであろう。

神智学者の長（ムッラー・サドラー）の優れた言葉では、土に惑わされた人間は、決して進歩することがないという、そういう人間は1本の樹木のようなものである。この12イマーム派の偉大な神智学者は、この説を自らの注釈の中で論じ、次のようにいう。「“土と自然に惑わされた人間”は樹木のようなものである」と。なぜなら、樹木は決して進歩しないからである。（樹木

は決して発達ということをしな、なぜなら、われわれが観察し、伸びていると見なすところのものは、樹木の枝の部分であり、樹木から派生してきたところのものである、その根源である根、口、脳、頭は地中深くもぐりこんでいる)気持ちのすべてが自然に集中し、自然から糧をえているような人間は自然の顔を飾りつけるが、空手で去ってゆくのである、決して、発展ということをしな、そういう人間の人間性は空っぽである。

クルアーンの言葉にいう。彼らは虚ろな心である、“af'idatuhum hawā'” (訳注 ③)、すなわち、彼らの心は空っぽである、という意味である。なにも彼らの心の網の中にはないのである。彼らはある期間土から取り出そうと努力をし土を飾り付け、そして空手で鹿島立ち！なのである。

“yuqallibu kaffayhi alā mā anfaqa” (訳注 ④)、つまり、両の手を合わせて、どうして生涯を無駄に過ごしたのだろう、と言う日がやって来るのである！だから、自然から抜け出し、移動し、自然を捨て、土への執着を切り捨てない限り、自然と土の中に沈みこんでしまうのである。“不浄のものを避けよ、”<sup>22)</sup>すなわち、神以外のあらゆるものから遠ざかることがヘジラ（聖遷）ということなのである。あらゆる繫縛、執着から解き放たれるのがヘジラなのである。ヘジラをすれば、進むことができるのである。（急ぎ、とは運動する者の修飾語であり、速度とは運動の属性である。）

神は次のようにいいたまう、運動している人間よ、おまえは中庸を守りなさい、中庸を守り、道の選択に慌てなければ、道をみいだすであろう、そして、足早に進みなさい、“あなたがたの神の許しを求めて急ぎなさい”<sup>23)</sup>と、神は急ぐように命令を下したのである。神は、今、あなたは動いている、今、あなたはヘジラをしている、今、あなたは旅人となっている、今やあなたは自然から解放されたのだから、急ぎなさい、といったのである。これが、急速という境地である。この境地では、まったく衝突したりすることはないのである。

“最善は中庸なり”とは実践哲学の中で言われることであり、思弁哲学のなかで言われているのではない。思弁哲学のなかでは、われわれには、中庸を

ではない、出来る限り、上をとれ、あるいは、あなたが敬意を払い、模倣している指導者（預言者ムハンマド）が何といているのか見てみよ。すなわち、“我が主よ、我が知識を増したまえ”<sup>24)</sup>と。大学生や神学生が自分の勉強はもう十分であるというとするれば、それはその者にとっての無知の始まった日なのである。こんなことは我々の精神的および倫理的社会のなかにもある。人間はこのくらいの勉強で十分であると言ってしまったら、それが無知の始まりの日なのである。“我が主よ、我が知識を増したまえ、と言え。”この前文をクルアーンのなかに読むとき、神はその預言者にかくの如く言って、そしてわれわれにあなたがたの預言者の宗教に従いなさい、この程度の知識で十分であるというてはならない、と命じている。

行き過ぎと中庸と言うことがあり両極端が咎められ、中庸が誉められるということが起こるのは実践的な事柄の中である。しかしながら、知的な事柄や思弁的哲学の中では、思弁的理性は多ければ多いほど良いのである。この場合、速度があっても衝突はない、善の道には速度を妨げるものはないのである、なぜなら、この道はアフリマンから解放される道だからである。

悪魔は道の始めにいるのである、道の終わりに待ち伏せしてはいない。悪魔はある程度まで弓を射かけてくるだけである、悪魔は“あなた（神）の直ぐなる道で彼らを待ち伏せしてやる”<sup>25)</sup>といている、すなわち、私（悪魔）は直ぐなる道のほとりに座って襲い掛かってやろう、ということである、しかしながら、人間特急は悪魔の矢の射程の外にいる、この精神的旅路ではいかなる損傷も人間にはおこらない、「おお、魂よ出来る限りの努力をせよ」。

これが急速の至高の次元である、“あなたがたの神の許しを求めて急ぎなさい”（とはこの意味である）。

もしも、急速の次元において、ある者は早く、ある者は遅れていたとすれば、努力して勝利者となりなさい、ここでは追い越すことは誉められることなのである、他の者より前に出ることは、称賛されることなのである。

これは、豊かさであって数が多いということではない。これは人間に知性を与えるもので、人間から知性を奪う数の多さではない。出来る限り追いつくように、と言われている。すなわち、“善行を競い合うが良い”<sup>26)</sup>と言われている。良い行いにおいて、他人より先んじよ、競って勝利者となれ、この良いことは誰かほかの人がするだろうなどと言ってはならない、のである。見るがよい、“革命の戦士たち”が前線に行くためにいかに競争しているのかを。善行については勝利者となるように努力せよ、といわれている。努力して他の人々より物知りになれば、あの人は自分より物知りであるなどと言ってはならない。この場合の謙遜は嘘つきの謙遜は嘘なのである。努力して他人より公正になれば、努力して他人より勇敢になれば、努力して他人より禁欲的になれば、他の人々は自分より優れているなどと言ってはならない。この場合には、敬意を表することや韜晦することは戒められている。

この善があなたの手で実践されるように努力せよ、あなたの心が知識と正義で一杯になるように励みなさい、この禁欲と懼神があなたの心の中に生きるようにしなさい。

われわれが教えられた祈りや無謬のイマームからつたわっている祝福の祈りは教養の蓄積を奨励している。たとえば、『ドアエ・クマイル』（訳注⑤）という祈禱書の中に、“神よ私をあなたの最良の下僕となしたまえ、と唱えなさい”とあるように。

“彼らのうちでとりわけあなたに近い者、かれらのうちで最もあなたに近い地位の者”<sup>27)</sup>という語句は競争への呼びかけである。これは勝利への呼びかけで、人間は無謬に近づくように努力せよとのことである。

志しが手近の物知りのようになりたいと言うようなことであってはならない。命令は競争し追いつくことの命令である。道は空いて、障害はない。“寛容と博愛においてのみ施しを増やす者よ。”<sup>28)</sup>。

祈りを無視してはならない、特に、『サヒーフェ・サッジャーディエ』（訳注⑥）を無視してはならない。どのイスラーム教徒の家にも、クルアーンと

『ナフジュ・ル・バラガ』(訳注 ⑦)のほかに必ず『サヒーフェ・サッジャーディーエ』がなければならない。この祈りは人間に靈氣をあたえる。この『サヒーフェ・サッジャーディーエ』のなかに次のような言葉を読む、<sup>29)</sup>“欠いている者が欠いている者になにかを要求するのは愚かで間違ったことである。”<sup>29)</sup>これは祈りの形式で哲学をおしえているのである。それは頌詞の形式をとった1つの世界観の体系なのである。この内容豊富な『サヒーフェ・サッジャーディーエ』のなかに、次のような言葉がある。

“神よ、私を貧しい者をいやしみ、富める者を貴ぶような考えから清めたまえ、なぜなら、気高き者とは神への信仰のゆえに気高いのであり、貴いものとは神への神心のゆえに気高いのだから。”<sup>30)</sup>

これがわれわれの教養である、そして、追い越しのための教えはすべての次元にみられる。ある人があの深い意味にむかってヘジラ(聖なる旅)をはじめ、あの靈的な意味にむかって速度を増し、あの精妙な意味にむかって先頭にたって進めば、ヘジラと急速と追い越しのあとで、高貴な指導者の地位(イマーマト)に到達する。“私たちを敬虔な信者たちの導師(イマーム)にしてください”<sup>31)</sup>、至高の神が成功を恵まれるならば、次の会にここで、これらの次元の最終段階を論じてみたい、それはすなわち“共同体のイマーマト”の高貴な地位である、それは必然的に“法学者の監督権”がこの問題と対応している、なぜなら、彼はこれらの次元を終了していなければならないからである。御列席の方々に感謝と敬意を表するとともに、至高の神が預言者と聖者の恵みによって革命の偉大な指導者を支持し、勝利に導き、イスラームの輝かしい革命を究極的勝利に導き、戦士たちを前線より勝利のうちに帰還させ、革命に殉じた人々の靈魂をカルバラーの殉教者と預言者と聖者の靈魂に合わせ、あらゆる物事の終わりが良い結末となることをのぞむ。“神がわれわれとあなたがたを許したまうことを。”



## 原注

原注の大半は引用されたクルアーンの章句の翻訳である。クルアーンの翻訳についてはすでに本文中にその日本語訳を示してあるので、これについては章句名と節番号のみを示しておくことにする。節番号はフリューゲル版の節番号に基づく。

- 1) 第9章「改悛」33。
- 2) 第16章「蜜蜂」38（カイロ版では36）。
- 3) 第4章「女」106（カイロ版では105）。
- 4) 第26章「詩人たち」193、194。
- 5) 第27章「蟻」6。
- 6) 第53章「星」1～4。
- 7) スィーン、バー、クワーフ、のはじめの2文字はアという母音をつけてサブクと読む、すなわち競馬でかけをすることである。もしも最初のスィーン、の字だけアという母音をつけてサブクと読むと、前もって決められた明瞭な筋書きで、無実のものを裁くということになる。ここでははっきりと神の掲示と言葉をさししめしているもので、それ以上なにも付け加えるものはない。
- 8) 第81章「巻き付ける」24（原注には第80章とあるが誤り）。
- 9) 第17章「夜の旅・あるいはバニー・イスラーイール」80（カイロ版では78）。
- 10) 第17章「夜の旅・あるいはバニー・イスラーイール」81（カイロ版では79）。
- 11) 第4章「女」86（カイロ版では84）。
- 12) 第6章「家畜」90。
- 13) 第35章「天使・あるいは創造主」41～42（原注に4とあるのは誤り）。
- 14) 第39章「群れなす人々」31（カイロ版では30）。
- 15) 第21章「預言者」35（カイロ版では34）。

- 16) 第16章「蜜蜂」91 (カイロ版では89)。
- 17) 第45章「腰抜けども」22 (カイロ版では23)。
- 18) 第21章「預言者」67。
- 19) 第22章「巡礼」41 (カイロ版では40)。
- 20) 第9章「改悛」113 (カイロ版では112)。
- 21) 第5章「食卓」4 (カイロ版では3)。
- 22) 第74章「外套に身を包んだ男」5 (原注に4とあるのは誤り)。
- 23) 第3章「イムラーン一家」127 (カイロ版では133)。
- 24) 第20章「ター・ハー」113 (カイロ版では114)。
- 25) 第7章「胸壁」15 (カイロ版では16)。
- 26) 第2章「牝牛」143 (カイロ版では148)。
- 27) 『ドアーエ・クマイル』 (シーア派初代イマーム・アリーの祈禱書) からの引用。
- 28) 『サヒーフェ・サッジャーディーエ』 (シーア派4代イマーム・アリー・アスガルの祈禱書) から引用。
- 29) 同上
- 30) 同上。
- 31) 第25章「天啓」74。

## 訳注

- ①クルアーン第5章「食卓」5節。クルアーンは神が預言者ムハンマドをつうじて長期間にわたって示した啓示の集成であるが、この章句が神からの最後の啓示であるとされている。
- ②同上。伝承によれば、この最後の啓示の直後に預言者ムハンマドはアリーを自らなきあとの後継者に指名したとされる。
- ③クルアーン第14章「イブラーヒーム」44。
- ④クルアーン第18章「洞窟」40。
- ⑤『ドアーエ・クマイル』とは、シーア派の初代イマーム・アリーが側近のクマイル・ブン・ズィヤードに教えた祈禱の言葉の記録である。シーア派の世界ではこの祈禱書を読誦することで信仰が深まり、人格の完成に資すると見なされて重要な文献のひとつとされている。
- ⑥『サヒーフェ・サッジャーディーエ』は、シーア派第4代イマーム・アリー・アスガル・ザイヌ・ル・アービディーンの祈禱の言葉を集成したものである。これもまた上記の書物とおなじ理由で、シーア派の貴重な文献のひとつとされている。
- ⑦『ナフジュ・ル・バラールガ』は12イマーム・シーア派初代イマーム・アリーの語録である。12イマーム・シーア派の世界ではクルアーンにつぐ重要な書物とされているが、現在ではシーア派の世界に限らず、スンナ派の世界でもイスラーム的思索の原点となるものとして重視されている。